八王子市立第七小学校(1年目)

 【校長】
 【児童数】
 【学級数】

 松丸 渉
 638名
 24学級





次の取組へ

【課題・改善】

- ・研究授業を通し、「主体的に学び、対話を通して学び合う」児童の姿が見られるようになってきたが、運動の特性を味わいながら体育学習を行うことが課題である。
- ⇒体育学習をさらに充実させるために、体育科 の見方・考え方を働かせた「深い学び」の視 点を取り入れた研究を推進する。
- ・運動の日常化が図られていない児童がいる。
- ⇒運動を日常化させる活動(レンジャーランド 等)を充実させる。

【実態・課題】

- ・新型コロナウイルス感染症や暑さ等の影響から、運動に親しむ児童が減少している。 (休み時間に室内で過ごす児童の増加)
- ・指示待ちの児童が多く、主体性をもって学習 に取り組める児童が少ない。
- ⇒体育科の授業改善を通して、運動の楽しさを 味わい、運動への関心を高める。
- ⇒運動を日常化させる取組を通して、運動習慣 の定着を図る。

目標

- ・運動をすることが好きな児童(90%以上)
- ・毎日、合計60分以上の運動をする児童(90%以上)
- ・体育学習において、友達と助け合ったり教え合ったりしている児童(90%以上)

【成果】

- ① 遊びの調査の結果から、中休みと昼休みに校庭で遊んでいる割合が男子は30%から42%に上昇、女子は14%から32%に上昇するなど、運動に親しむ児童の割合が増加した。
- ② 体育科の授業において1単位時間の身体活動量を測定したところ、多くの児童が中高強度の運動をしている時間が大半を占める等、運動時間の確保につながった。
- ③ 児童アンケートの結果からは、「友達と協力して学習を進めることができましたか」という質問に対し、「はい」と答えた児童の割合が75%から86%に上昇するなど、他者とのより良い関わりの中で学習する児童の割合が増加した。

【取組】

- ○体育学習の授業改善
- ①個別最適な学びを促す工夫
- ②主体的な学びを促す工夫
- ③対話的な学びを促す工夫
- ※共栄大学と連携した児童の状況把握
- ○運動の日常化(レンジャーランド等)
- ・休み時間等を活用した多様な運動機会の創出
- ・校内環境(用具)を整備し、運動を促進
- 〇自己肯定感の向上
- ・自尊感情測定尺度を活用した児童の実態把握
- 〇食育の推進
- 発達段階に応じた食育指導

【取組(詳細)】

〇体育学習の授業改善

- ①個別最適な学びを促す工夫【教師の働き掛け】 児童の動きや考えがつまずく場面を想定し、課題 を解決できるような言葉掛けや、思考を促す言葉 掛けを充実させた。(第2学年ゲーム)
- ②主体的な学びを促す工夫【ICT機器の活用】 自分の動きがサーブ、レシーブ、トス、アタ ックのポイントを押さえたものになっている か否かを確認するために、必要に応じて一人1 台の学習者用端末を活用した。(第5学年ボール運動)



「うん!撮って おくね。」

「どこに動いたら、ボール

がもらえそうかな? |

③対話的な学びを促す工夫【作戦ボードの活用】 作戦ボードに簡易的な作戦を貼れるようにすることで 作戦についての話し合いが生まれ、対話的に学習が進 むよう工夫した。(さくら学級ゲーム)



共栄大学の専任講師と連携し、身体活動量を測定し、効果を検証した。

O運動の日常化(レンジャーランド等)

様々な運動に親しませる時間(レンジャーランド)を設けたり、年間を通した体育週間(長なわ、短なわ、持久走)を行ったりすることで、運動習慣の定着を図った。

的あての場

川渡りの場

長なわ週間

休み時間の用具貸出











東京家政大学の特任講師と連携し、遊びの種類や強度等を測定し、効果を検証した。

〇食育の推進

年間指導計画に基づき、各学年の発達段階に応じた食育 指導や食育週間(食べるんジャー)を実施した。

